



害虫飼育法 タバココナジラミ

熊本県農業研究センター 生産環境研究所

ひ 桶 口 さと 聰 志

は じ め に

タバココナジラミは、熱帯、亜熱帯および温帯地域の世界各地に広く生息している。体長は成虫が約0.8mm、幼虫の1~2齢が0.2~0.4mm、3齢が約0.6mm、4齢が約0.8mmである。基本的に寄主植物の葉裏で生活しており、成虫および幼虫ともに口針を使って植物の汁液から栄養を摂取して甘露を排泄する。また、産雄単為生殖であり、未受精卵は雄となる。

本種は薬剤感受性や寄主適合性などの生物的特徴が異なる多くのバイオタイプが存在する (PERRING, 2001)。このためタバココナジラミは、一つの生物種ではなく種複合体 (species complex) として扱われ (PERRING, 2001), 600種以上の寄主植物が報告されている (OLIVEIRA et al., 2001)。国内では複数のバイオタイプが確認されているが、被害が問題となるのは、1989年ごろに海外から侵入したバイオタイプB (Middle East-Asia Minor 1 (MEAM1)) と2004年に侵入が確認されたバイオタイプQ (Mediterranean (MED)) である。我が国での寄主範囲はバイオタイプBが30科88種、バイオタイプQが30科64種

と報告されている (飯田・本多, 2010)。

タバココナジラミの被害は、吸汁による寄主植物の草勢低下やすす病の発生、着色異常症の発生、病原ウイルスを媒介することである。媒介する病原ウイルスで問題となるのは、トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV), トマト退緑ウイルス (ToCV), ウリ類退緑黄化ウイルス (CCYV) などである。本種による被害は、直接的な吸汁害よりも病原ウイルスを媒介することによる間接的被害が大きくなりやすい。これらの防除対策として薬剤の使用頻度が高くなり、各種薬剤に対する本種の感受性低下が多く報告されている。そこで本稿では、薬剤感受性検定や新農薬実用化試験などに供試することを目的とし、本種の飼育法と放虫方法を紹介したい。

I 材料の採集

タバココナジラミは、施設栽培のトマト、ナス、キュウリ、メロンなどの作物で採集できる。採集する発育ステージは、圃場で見つけやすい成虫が適している。採集圃場にオンシツコナジラミが混発している場合は、図-1 や桶口 (2021) を参考に識別する。幼虫の採集は、固着



図-1 タバココナジラミ成虫（左）とオンシツコナジラミ成虫（右）

タバココナジラミ：定位している葉面に対して45度以上の角度で翅をたたみ、左右の翅が重ならず隙間ができる。

オンシツコナジラミ：定位している葉面に対してほぼ平行に翅をたたみ、左右の翅が重なる。

Rearing Techniques of *Bemisia tabaci* (Gennadius) on Vegetables.

By Satoshi HIGUCHI

(キーワード：コナジラミ、飼育法、放虫方法、TYLCV、ToCV、CCYV)